

日本の『史記』研究

藤 田 勝 久

はじめに

中国では、秦の統一のあと、漢帝国の成立によって政治・社会の基盤が作られ、文化史上においても多くの古典が残された。それらは中国内部とともに、東アジアの周辺諸地域にも伝えられて影響を及ぼし、日本も中国との長い文化交流の歴史をもっている。

その最初は、漢代に情報が知られた倭国の時代から、飛鳥・奈良時代にかけて中国文物・制度が積極的に輸入され、いわゆる遣唐使を派遣した時期には、漢籍をふくめて多くの文化の受容があった。その後、交易と戦争がありながらも中国から日本への文化流入はつづき、江戸時代でも漢籍の輸入は重要な役割をもっていた。しかし幕末から明治にかけて、日本が西欧の制度文物を取り入れるようになると、やがては中国から日本への留学生が増えるようになり、日本の科学技術や文化を学ぶ交流が始まる。この意味において日中両国は、当初に日本が中国文化を受け入れていた状況から、近年になってはじめて相互の文化交流を行う時代になったといえよう。その日中文化交流史には、いくつかの側面がみられるが、漢籍の輸入と受容史もその一つである。

日中の交流史や漢籍の輸入は、すでに大庭脩・王勇編『日中文化交流史叢書 9 典籍』（大修館書店、1996年）や、大庭脩『漢籍輸入の文化史』（研文出版、1997年）などの概観がある。また日本の漢文学史についても、斯文会編『日本

漢学年表』(大修館書店, 1977年)によって概略がうかがえ、さまざまな時代の考察がある。しかしその中で、どのように漢籍が読まれ受容されたかという問題も重要なテーマであり、それは個々の書籍について検討しなくてはならない。ここでは『史記』を中心に、その受容と研究の一端を展望してみたい。

前漢時代の武帝期(前90頃)に司馬遷が編纂した『史記』は、中国最初の体系的な歴史書であり、また文学・思想の分野でも注目を集めている。そのため今日まで多くの研究があり、文学評論や伝記・一般的な読物になるとさらに多くの著書・論文がある。この『史記』について、まず問題となるのは、司馬遷がどのような歴史背景と目的で著述をしたかという成立過程の解明にある。これは『史記』の本質を考え、また中国古代史研究の基礎史料として利用するためには重要な課題である。しかし一方で『史記』は、2,000年以上も前の著述であり、その写本の形態を考えても司馬遷が残した当時と同じではなく、現在の『史記』は宋代以降の印刷本によって初めて全体が伝えられたものである。また『史記』本文をより深く理解するためには、先人の残した歴代注釈・考証を参照しなくてはならない。ここから『史記』の研究には、成立過程の考察だけでなく、その伝本と受容・研究の歴史を知る必要がある。

以上のような観点から、中国において『史記』の研究史が重視されることはいうまでもない。しかし近年では、日本の『史記』研究にも注意が向けられている。たとえば中国科学院歴史研究所第一・二所編輯『史記研究的資料和論文索引』(科学出版社, 1957年)では、中国の目録の中に、日本の『史記』研究の論文・著書をごくわずかに収録するにとどまっていた。しかし楊燕起・俞樟華編『史記研究資料索引和論文專著提要』(蘭州大学出版社, 1989年)には、日本の古鈔本・版本とその研究を目録中に組み込み、また覃啓勳『《史記》与日本文化』(武漢大学出版社, 1989年)や、張新科・俞樟華著『史記研究史略』(三秦出版社, 1990年)付録「日本《史記》研究概述」のように、日本の研究紹介が現れている。さらに徐興海主編『司馬遷与《史記》研究論著專題索引』(陝西人民教育出版社, 1995年)では、新たに数多くの日本の研究が追加されている。この間の事情については、池田英雄『史記学50年—日・中「史記」研究の動向』

(明德出版社、1995年)に詳しい。

このように中国で日本の『史記』研究が注目されるには、いくつかの理由がある。その一は、中国には残っていない『史記』の古鈔本や版本の欄外に「書き入れ」があり、そこに貴重な資料が残っているからである。したがって、これらを集成した瀧川亀太郎著『史記会注考証』や、さらに補訂した水沢利忠著『史記会注考証校補』が注目され、中国でもこの考証をめぐる議論が展開されている。その二は、中国の研究者とは異なる独自の視点からの研究があり、その詳細な議論の展開が注目されている。ただし先の「日本《史記》研究概述」にも指摘するように、これまでの日本の研究は、中国の研究成果をあまり取り入れておらず、議論を深化してゆく上で重複や誤解が生じている場合がある。この意味において、日本の『史記』研究史とその成果を正しく紹介することも必要であろう。

これまで日本の『史記』研究史には、先の『史記会注考証』史記総論や、池田四郎次郎著・池田英雄校訂増補『史記研究書目解題稿本』(明德出版社、1978年)のように中国・日本の著作を位置づけた業績があり、また池田四郎次郎「我邦に於ける史記の価値」(二松大学雑誌『二松』2、1932年)、池田英雄「著作より見たる本邦先哲の史記研究—古今伝承1300年間の消長」(『大東文化大学創立六十周年記念中国学論集』所収、1984年)などに、その大勢が述べられている¹⁾。

本稿では、これまでの成果によりながら、とくに戦後日本の『史記』研究を整理しておきたい。

1 『史記』版本と注釈の研究

『史記』版本の影印刊行

最初に注目されるのは、戦前までの動向を継承して、『史記』版本の調査と、影印の刊行がすすんだことである。その一例として、1956・57年に京都大学人文科学研究所と同志社大学ハーバード燕京研究所の共同作業による、山形県米

沢市の旧上杉家の『史記』『漢書』『後漢書』三史の宋版調査がある。調査には、内田智雄、森鹿三、平中荅次、日比野丈夫、水澤利忠氏らが参加され、大庭脩氏は『漢籍輸入の文化史』で、そのときの様子をつぎのように記している。

この調査以前に米沢では、1592年の豊臣秀吉の朝鮮侵略のとき、直江兼統が『史記』の宋版を持ち帰ったと言われていた。しかしこの『史記』は、南宋時代に建安の黄善夫が刊刻したものを外側で切りそろえ、縦約33.4センチ、横22.9センチの和紙に貼り付けて、書き入れに便利のように改装している。その蔵書印をみると、「水光卯青」という朱印と墨印があつて、鎌倉時代初期の将来が推定され、また伯夷列伝以下七巻の巻首に月舟（月舟寿桂、号幻雲）の鼎形印があることから、室町時代には月舟の蔵書となっていた。それがさらに南化玄興の手を経て、親交のあつた直江兼統の蔵書となり、上杉家に譲られたものとおもわれる。この南化本『史記』には、上下・左右の余白に多量の書き入れがあり、それは月舟の自筆注のほかに、それ以前の博士家の説や、桃源瑞仙の桃源抄の引用、史記正義の佚文が見られる。以上の評価を受けて、のちに旧上杉家の『史記』は国宝に指定されている。これは漢籍調査によって、誤った伝えを正したものである。

これに関連して、旧上杉家の宋版『漢書』『後漢書』の調査も日本の漢籍研究の特色となっている。平中荅次「米沢の前後漢書について」（『米沢善本の研究と解題』1958年）は、これらの伝来と版本の特徴などを説明し、『史記』との対比にも興味深い話題を提供している。

その後、日本に所在する版本をふくめ、尾崎康『宋元版正史の研究』（汲古書院、1989年）では、『史記』から『金史』にいたる二十一史の調査を詳しく整理している。『史記』の部分は、集解本、集解索隠二注本、集解索隠正義三注本に区分し、日本の杏雨書屋蔵、静嘉堂文庫蔵、歴史民俗博物館蔵、東京大学東洋文化研究所蔵、宮内庁書陵部蔵、天理図書館蔵、慶応義塾図書館蔵などの版本を解説する。このような漢籍調査が、『史記』をふくむ善本の影印刊行と結びついている。

以上のような漢籍調査と並行して、漢籍の影印刊行が行われた。その一つは、

和刻本正史シリーズの刊行で、そのうち『史記』は長沢規矩也解題『和刻本正史史記(一)(二)』(汲古書院, 1972年)として影印された。これは鶴牧藩修来館所蔵の『史記評林』を、明治2年に翻刻したものである。これ以降、和刻本『史記評林』の研究も進んでいる。

つぎに先の旧上杉家の三史宋版が、年月を経てそれぞれ刊行された。最初に影印されたのは『漢書』で、『国宝漢書・宋慶元本』上中下(朋友書店, 1977年)として刊行された。ただしこれは本文の影印で、書き入れの部分は補足する必要がある。

これに遅れて『史記』は、水澤利忠・尾崎康・小澤賢二解題『史記(一)～(十二)』国宝史記, 国立歴史民俗博物館所蔵, 黄善夫本(汲古書院, 1997～98年)として刊行された。これは、書き入れをふくめた全体の写真を収録し、最終巻に尾崎康「黄善夫本史記について」、小澤賢二「南化本『史記』解説」の解題がある。この影印は、『史記』本文の校訂に貢献するが、さらに重要なのは日本に特有な「書き入れ」の形態をうかがうことができ、『史記』注釈の研究に貴重な材料を提供することである。というのは、日本の古鈔本や版本は、『史記』本文が貴重であるだけでなく、他の版本との比較・校訂や、他の注釈を引用した「書き入れ」があり、ここに現在では散逸した注釈がみられるのが大きな特徴である。その一つは、歴代の日本人の注釈や、『史記正義』の佚文であり、先に『史記会注考証』は、この正義佚文をふくむ「書き入れ」の注釈を利用した部分がある。しかしこのような「書き入れ」の形態は、原本を未見の研究者には理解しがたいものがあり、一部には偽書ではないかという疑問が出されていた。したがって『史記』全体の影印を提供することによって、少なくとも、その「書き入れ」が偽書であるという誤解は解かれるであろう。

『後漢書』の影印は、『国宝後漢書』尾崎康解題(汲古書院, 1999年)が刊行予定である。これで上杉家の三史がすべて影印されることになり、今後は『史記』など三史の本文・注釈の研究にとって基礎となる事業である。

『史記』注釈の研究

これまで行われた漢籍調査、『史記』版本の影印刊行と並行して、さらに本文・注釈の校訂の研究が進んだ。その代表的な業績は、水澤利忠『史記会注考証校補』全9冊(1957～70年)である。自序によれば、『史記』の善本を求める事業とあわせて、瀧川亀太郎『史記会注考証』が校勘と諸家旧説の収集にすぐれていることを評価する。そこで水澤氏は当初、乾隆武英殿本を底本として攷異・校勘を試みたが、のちに南宋慶元黄善夫刊本が善本であると知り、『史記会注考証』の本文・三家注を校訂し、正義佚文の増補などを行った。そして各巻に、校訂に利用した版本など諸資料の一覧と略号を示し、『史記』全巻にわたって考証したものである。

この業績は中国でも評価され、のち瀧川資言考證・水澤利忠校補『史記会注考証附校補』上下2冊(上海古籍出版社、1986年)を刊行して、入手に便利となった。そして上巻には、『校補』巻一上の冒頭の自序と古鈔本・版本の写真図版47枚が収録され、あとは校訂部分が合刻されている。しかし「史記之文献学的研究」の考証論文は収録されておらず、そのため調査した文献の説明と、その研究方法が十分に紹介されなかったのは残念である。先の「書き入れ」の問題にしても、実はこれらの図版に明確に示されており、文献学的研究の要約あるいは全訳があれば、古鈔本・版本の性質が理解されたであろう。

水澤利忠氏の研究では、これらの写真図版の収録とあわせて、日本の『史記』古鈔本・版本の考察が、もう一つの大きな特色である。文献学的研究の序論では、あらためて『史記会注考証』の二大特色が研究の出発点であることを述べる。その1は、史記古鈔本との校勘がされていることであるが、これは主として大島賢川の「博士家本史記異字」により、さらには日本の史記古板本の「書き入れ」に遡ることを見出した。2は、『史記』正義の佚文を一千余条ほど拾遺していることであるが、これも東北大学所蔵の慶長古活字本『史記』の「書き入れ」に関係する幻雲抄に由来することが判明した。そこで水澤氏は、さらに日本に残存する『史記』古鈔本・版本を調査することによって、善本の追求と注釈の網羅を試みようとした。そのため、『史記』古鈔本と古板本の書き入れに

ついて考察し、くわえて史記抄の性格を論じている。また単注本の章では、集解本・索隠本・正義本を考察し、合刻本では、集解・索隠二注本、三家注本、明板評釈本について考察している。したがって『史記会注考証校補』の校訂は、これらの考察と方法によって示されているのであり、今後とも継承すべき業績とおもわれる。

水澤利忠氏は、『史記会注考証校補』の目的の一つに、『史記』正義佚文の収集をあげていたが、それを詳しく考察したのが水澤利忠編『史記正義の研究』（汲古書院、1994年）である。ここには序文で、当初は南化本『史記』の総合研究を目標としたが、史記正義の研究に集中した経過を述べ、「南化本『史記』と『史記正義』の研究」で解説をする。つづいて小澤賢二編「史記正義佚存訂補」と、研究会のメンバーによる史記正義語彙索引を作成している。

とくに史記正義の研究は、先の『史記会注考証校補』に接続している。すなわち瀧川亀太郎氏は、すでに『史記会注考証』で正義佚文を収録していたが、そのほか佚文を追加した未刊の『史記正義佚存』をまとめていた。そこで水澤氏は、瀧川氏未見の佚文を収集して『校補』に組み入れたが、さらに小澤賢二氏の追加をへて「史記正義佚存訂補」に集約したという。これによって、日本の古鈔本・版本の書き入れから史記正義佚文を復元するという作業は、一応の完成をみたことになる。したがって今後は、正義佚文をふくむ「書き入れ」からの注釈について、内容の検討をすすめる必要がある。

このように『史記』研究の基礎として、テキストと日本古鈔本・版本の「書き入れ」の研究がすすむと、つぎに注目されるのは、日本人による『史記』注釈の再評価である。その代表的な注釈・研究には、つぎのような成果がみられる。

まず大阪大学懐徳堂文庫復刻刊行会監修『懐徳堂文庫本・史記雕題』上・中・下（吉川弘文館、1991、92、93年）の刊行がある。江戸時代の中井履軒の史記雕題は、梁玉繩『史記志疑』と並ぶ高い評価がされており、すでに『史記会注考証』と『史記補注』に引用されている。寺門日出男氏の解題によれば、『史記会注考証』は東北大学附属図書館にある旧狩野享吉氏所蔵の写本で、『史記補注』

は池田四郎次郎氏が所有の写本によるという。この『史記雕題』は、延宝2年(1674)に京都の八尾再刻版『増補史記評林』の和刻本の欄外に、履軒が自筆で書き込んだ注釈である。その復刻は、注釈のある部分の写真を掲載し、読みにくい箇所については下巻に一括して翻刻している。史記雕題の特色は、注釈の内容にくわえて、履軒が後世の竄入とみなした部分を「史記削柿」と区別する点にある。これによって史記雕題の全貌がわかると同時に、『史記会注考証』『史記補注』が、どのような形態で引用しているかが考察できる。また懐徳堂文庫には、履軒の自筆ではないが『戦国策雕題』も残されており、その内容は『史記』の注釈とも関連するであろう。

つぎに宮川浩也、小曾戸洋、真柳誠「『扁鵲倉公伝』幻雲注の翻字と研究」(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所, 1996年)がある。すでにみた南化本『史記』には、幻雲の書き入れがあるが、とくに扁鵲倉公列伝は詳細に記されている。主なものは、黄帝内経、難経、脈経などの医学書であり、引用医書は30種に及ぶといわれる。そこで医学史の側面からも、この部分は貴重な研究対象となる。本書では、南化本『史記』扁鵲倉公列伝の冒頭2頁分のカラー写真とともに、本文写真に対応する注釈の翻字を行い、注をほどこしている。そのほか論考篇では幻雲注の考察をし、付録として、存誠菴室刊影宋本『扁鵲倉公伝』と、一字索引を収録している。このような作業は、『史記』扁鵲倉公列伝と医学史研究の基礎となるものである。

『史記』の翻訳

明治以降の書き下し文の翻訳をうけつぎながら、日本では『史記』の現代語訳が多くあらわれたが、これも注釈・研究の一部である。

その形式は1に、漢文と書き下し・訳注がある。『史記』全体にわたる翻訳には、『史記』新釈漢文大系(明治書院, 1973~)があり、これまで吉田賢抗氏による『史記』本紀, 八書, 世家と、水澤利忠氏による列伝が刊行され、その後も訳注刊行が継続されている。また部分訳は数多くある。その一例は、田中謙二・一海知義訳『史記』中国古典選(朝日新聞社, 1966~67年)の春秋戦国

篇、楚漢篇、漢武篇の3冊があり、平易な訳がほどこされている。また福島中郎訳『史記』一、二、三（中国の古典、学習研究社、1981・84・85年）、黒須重彦訳『史記』四（中国の古典、学習研究社、1984年）は、本紀・世家・列伝の中から、よく知られた30数篇を選んで、書き下し・傍注と現代語訳を対比させ、巻末に注釈を付けたものである。このほか『史記』の数編をとりだし、解説とともに1冊とした翻訳が多く、また福島正『史記・漢書』（角川書店、1989年）のように『漢書』とあわせ関連論文を再録する書物もある。

2の形式は、日本文の現代語訳に注釈を付けたもので、これにも全訳と部分訳がある。最初の全訳には、小竹文夫・小竹武夫訳『現代語訳史記』（弘文堂、1956・57年）があり、のちに『史記』世界文学大系（筑摩書房、1962年）、『史記』世界古典文学大系（筑摩書房、1971年）、『史記』全8冊（ちくま学芸文庫、筑摩書房、1995年）として刊行された。また野口定男・近藤光男・頼惟勤・吉田光邦訳『史記』上下、中国古典文学全集（平凡社、1958・59年）があり、同訳『史記』上中下、中国古典文学大系（平凡社、1968～71年）の再版がある。これは野口定男氏が本紀・世家・列伝を翻訳し、表の序文と八書の部分を近藤光男・頼惟勤・吉田光邦氏らが分担訳したことに特徴がある。また全訳ではないが、世家・列伝部分の翻訳として、貝塚茂樹・川勝義雄訳『司馬遷一史記列伝』世界の名著（中央公論社、1968年）、小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝』世界古典文学全集（筑摩書房、1969年）、同訳『史記列伝』全5冊（岩波文庫、岩波書店、1975年）、小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記世家』上中下（1980～91年）などがある。このほかにも多くの翻訳があり、漢文教育や、『史記』の普及に貢献している。

ところで『史記』の翻訳のほかに、もう一つ注目されるのは、海外の『史記』研究の翻訳である。これは『史記』そのものではないが、日本の『史記』研究に影響を及ぼした著書である。

その代表的なものは、E.シャパンヌ著、岩村忍訳『史記著作考』（文求堂、1939年）で、のちに改訂されて『司馬遷と史記』（新潮社、1974年）が刊行された。ここでは司馬遷の『史記』編集方法について、先行材料をモザイクのよ

うに接続したもので、独自の歴史観が見られない点などを強調している。またバートン・ワトソン著、今鷹真訳『司馬遷』（筑摩書房、1965年）がある。李長之著、和田武司訳『司馬遷』（1980、のち徳間文庫、1988年）は、『司馬遷之人格與風格』（開明書店、1948年、のち再版、生活・読書・新知三聯書店、1984年）の一部を除く抄訳である。父・司馬談の影響や、詩人としての生涯を描く叙述が、原著の刊行から遅れて、ようやく日本に知られることになった。

以上までが、『史記』の本文・注釈・翻訳にかかわる研究の概略である。つづいて司馬遷と『史記』に関する研究動向をみておこう。

2 司馬遷の研究

司馬遷の伝記

『史記』の研究で、最初に問題となるのは司馬遷の伝記である。これは『史記』太史公自序や『漢書』司馬遷伝、「報任少卿書」を基本とし、『史記』全体をあわせて考えることになるが、1945年以前にも解題や論文の記述がある。この時期では、とくに一般的な伝記が多く刊行され、また研究も細分化した。しかしその反面、専門的な研究書は最近まで少ない傾向にあった。

戦後、大きな影響をもたらしたのは、武田泰淳『司馬遷』（日本評論社、1943年）である。この書物は、文学評論の形式であるが、その後も『司馬遷—「史記」の世界』などに題名を変えて、いくつかの出版社から何度も復刊された。その特徴は、冒頭に「司馬遷は生き恥さらした男である」と記すように、『史記』を発憤による書物とみなすことにある。その第一回の転機は、史官の伝統を受け継ぐ父・司馬談が「憤りを以て書け」を命じたことであり、第二回の転機は李陵の禍によって現代史を書こうとしたという。そして後半の「『史記』の世界構想」では、世界の歴史を「政治の歴史」とみなし、それを動かす人間に着目して、各篇を説明している。

これに対して歴史学の視点からは、岡崎文夫『司馬遷』（弘文堂、1958年）が刊行された。この分野では、大正時代の講義ノートを整理した内藤湖南『支那

史学史』(弘文堂, 1949年)や、岡崎文夫「支那史学思想の発達」(『岩波講座東洋思潮』4, 1934年)によって、すでに司馬遷と『史記』の史学史的意義が論じられていた。それを司馬遷の人物と思想に焦点をあてながら、一般書として叙述するが、その内容は学術的な根拠にもとづき、『史記』の本質についても簡潔に特徴を述べている。全体は3部から成る。1「司馬遷の生涯」では、生い立ち・宮仕え・晩年を論じ、司馬氏の家系や、司馬談の思想、司馬遷の旅行、郎中となること、作史、李陵の禍など基本的な問題を位置づけている。2「司馬遷に与えた時代の影響」では、司馬遷の一生がほぼ漢武帝の治世にあたるため、外征の情報が史地学の視野を開くようになったことや、経済的な動き・政治の動き・儒学の勃興が『史記』の描写に関連することを具体的に論じる。その要点は、司馬遷が天文学者・史学者の天職をもつと考え、任侠の風を自覚するとともに、時勢の動きを把握する洞察力をもち、社会の真相を究めようとしたとする。そして3「史記に就いて」では、『史記』の編集方法と体例について説明している。

また大島利一『司馬遷と「史記」の成立』(清水書院, 1972年)は、同じく歴史背景に留意しながら、年代順に司馬遷の事績を叙述している。これまでで、司馬遷と『史記』を説明する伝記は、すでに原型が作られたとってよからう。

このほか司馬遷の生涯・思想と、『史記』の世界を描く伝記が多くあらわれた。貝塚茂樹『史記』(中央公論社, 1963)、林田慎之助『司馬遷』(集英社, 1984年)は文学的な描写を生かし、小倉芳彦『入門史記の時代』(三省堂, 1980年、のち改題、ちくま学芸文庫, 1996年)は歴史背景に重点を置いている。また加地伸行『史記—司馬遷の世界』(講談社新書, 1978年)は、司馬遷の思想を中心に描き、著述目的として後世の読者への期待を重視する。

ところで、このように一般読者向けの司馬遷の伝記が書かれ、その生涯と『史記』の構想が広く知られるようになったが、それに反して岡崎文夫氏の『司馬遷』がやや専門的なことを除けば、司馬遷研究の学術書は近年まで出版されなかった。これらは個別の学術論文で、各々のテーマに即して研究されてきたという側面がある。それはたとえば、司馬遷の年譜にかかわる問題や、漢太史令

の役割、『史記』の編纂過程、李陵の禍の事情などである。これらを国内外の先行研究をふくめて紹介し、全体的に考察したのが佐藤武敏『司馬遷の研究』（汲古書院、1997年）である。これは日本で最初の司馬遷に関する専門書とってよいであろう。

『司馬遷の研究』では、まず司馬遷の家系をとりあげ、司馬氏が世々「周史」あるいは「周室の太史」という伝えは根拠が明らかではなく、戦国・秦漢時代の家系は実際の系譜によるが、それは司馬談が初めて太史令の官職に就いたことで、天官を重視し世襲したという思想にもとづくとも推測する。また『史記』の著述は、すでに李長之『司馬遷之人格與風格』（1948年）、顧頡剛「司馬談作史」（1951、『史林雜識』1963年）や、沢谷昭次「『史記』の作者たち」について」（『東洋学報』60-3・4、1979年）で、一部は司馬談が作成したという指摘がある。これについて司馬談の著述は、孔子の『春秋』に倣い、道家思想だけでなく儒家的な考えにもとづくとし、刺客列伝、張儀列伝、李斯列伝など戦国・秦漢の8篇を推定するほか、本紀・世家も構想にふくむと想定する。司馬遷の事績では、「司馬遷の生年」で王国維以下の景帝中元5年（前145）説と、桑原隲藏・郭沫若氏らの武帝建元6年（前135）説などの争点を整理して再検討し、景帝中元5年説を支持する。司馬遷の旅行では、第一回の二十歳の旅行が著述のための取材ではなく、①国家の祭祀箇所の探訪、②儒教の礼の学習、③史跡の調査という3点の目的をあげ、第八回までの旅行ルートと目的を確認した。司馬遷の官歴では、郎中、太史令、中書令の役割と、それぞれ同時代の官界・交友を考察する。さらに重要な転機である李陵の禍については、李陵の罪を問う武帝・群臣とは異なる公卿が司馬遷を招問したものとする。そして匈奴戦争で守勢にあり、財政に困窮した時勢での司馬遷の李陵弁護は、対匈奴戦争の指揮者や政策への批判ともなり、罰せられたとみなしている。

このほか後半部分では、『史記』の編纂過程を、大きく李陵の禍より以前と以後に二分して該当する篇を想定し、後人増補の問題を整理する。また附篇の「『史記』はどういう書物か」では、『史記』の書名、目録学上の位置づけ、『史記』各体例の内容上の特色を考察している。これらの論証では、司馬遷と『史記』

について、これまでの先行研究・基本史料の論点がほぼ網羅されており、今後の研究の基礎となるものである。

司馬遷の思想

伝記につづいて問題となるのは、司馬遷の思想である。これについては、経学、歴史観、春秋学とのかかわりなどの論考がみられたが、1945年以降においても経済思想や、運命観、人間観などの考察があり、とくに重要なのは歴史思想の研究である。その傾向を示せば、以下のようになろう。

まず戦後の社会経済史の影響を受けて、司馬遷の経済思想を扱う論文がみられる。たとえば加藤繁『史記平準書・漢書食貨志』（岩波書店、1942年）の訳注のように、これは平準書・貨殖列伝と密接にかかわるテーマである。すでに佐藤武敏「司馬遷における利己心及富の問題」（『文化』復刊2—1、1950年）では、ある程度の庶民の欲望と富者の存在を認める司馬遷の考えは、漢代の抑商政策の中で特異性をもつが、それは自由放任というほど無制限ではないと指摘し、板野長八「司馬遷の経済思想」（『北大史学』1、1951年）、内山俊彦「史記貨殖伝論」（『東方学』20、1960年）などをはじめ、それ以降も検討がつづいている。

つぎに司馬遷の運命観では、今鷹真「史記にあらわれた司馬遷の因果応報の思想と運命観」（『中国文学報』8、1958年）が、論賛にみられる思想を中心として、『史記』は因果応報と運命がからみあう人間の類型を描き出そうとしたと論じ、内山俊彦「漢代の応報思想」（『東京支那学報』6、1960年）は、当時の人々に信じられていた応報思想が、歴史叙述や政治意識にも反映されると指摘する。これは天命思想、人間観とも関連するテーマである。司馬遷の人間観では、福永光司「司馬遷の人間観」（『東洋の文化と社会』3、1953年）が『史記』を人間探究の書物として、利に対する欲求と、人間社会における義への関心を指摘し、利と義との矛盾を明らかにする天の思想を位置づける。また野口定男氏は、「史記に於ける『自信』について」（『立教大学研究報告』一般教育部1、1956年）のほか、『史記』の文学性や、秦始皇本紀・呂后本紀・孔子世家と列伝

にみられる人間像を論じ、のちに『史記を読む』（研文出版、1980年）でまとめられた。また上田早苗「漢初における長者」（『史林』55-3、1972年）が、『史記』の中で司馬遷が理想とした黄老・任依的人間像を指摘するなど、ほかにも司馬遷の人間観にふれた研究は多い。

しかしもっとも多いのは司馬遷の歴史観である。『史記』述作の意図は、よく知られているように司馬遷の「究天人之際、通古今之變」という言葉に提示されている。先の司馬遷の伝記や思想研究の中にも、何らかの形でこの歴史観に関連した言及がある。その動向をみると、内山俊彦「司馬遷と歴史」（『山口大学文学会誌』14-2、1963年）は、司馬遷の歴史思想が、董仲舒に代表される春秋公羊学を根底とし、循環論の影響を受けていることを確認する。また大濱皓「司馬遷の歴史観」（1975年、のち『史記と史通の世界』東方書店、1992年）は、司馬遷が変化を歴史の本質として重視したと述べ、歴史と個人・道徳・政治思想・運命観との関係を論じている。これに対して川勝義雄「司馬遷の歴史観」（1973年、『中国人の歴史意識』平凡社、1986年）は、歴史哲学の視点から『史記』の世界史的構想を論じ、司馬遷には世界の真相（道）と価値を問う独自の問題意識があったと説明している。最近では、稲葉一郎『中国の歴史思想一紀伝体考』（創文社、1999年）が、典型的な歴史思想を紀伝体の歴史叙述に見出し、とくに『史記』『史通』を中心に論じている。第二章「司馬遷父子と『史記』」では、顧頡剛「司馬談作史」の論点をさらに展開して、司馬談の作成した本紀・世家・列伝を基礎に、司馬遷が五帝本紀や十表・八書を追加した点を重視する。また司馬談は禪譲と応報思想を一貫したテーマとするが、司馬遷の思想は、応報の法則や天道に対して懐疑を表明し、広範な学術思想を総合したと位置づけ、歴史思想の相違に注目している。

このほかにも司馬遷の思想にふれた研究は多く、司馬遷の匈奴観、世界観などもその対象となる。これらは、以下の『史記』各篇や列伝研究とも深く関係している。しかし近年日本の研究動向をみると、おおよそ60年代までに基本的な問題点が出され、70年代以降の研究は、その成果を継承して展開されているといえよう。

3 『史記』研究のテーマ

『史記』の総論

『史記』の研究は、その成立過程と歴史書の本質を論ずることに通じるが、それはまた全体的に考察した著作・論文や、各篇を論じた研究に分かれる。

まず『史記』の全体にかかわる研究では、戦後まもなく『史記』の構成材料と編集方法を考察した東京・京都の総合研究が注目される。その要旨は、三上次男・栗原朋信等「史記の構成史料に関する基本的研究」（昭和27・28年度総合研究報告集録・人文篇、1953年）に一部がみえ、その成果は先の水澤利忠氏の『史記』版本の研究や、のちに栗原朋信『秦漢史の研究』（吉川弘文館、1960年）の秦始皇本紀に関する研究、山田統氏の「史記と古代紀年」（1965、のち『山田統著作集』1、1981年）などをはじめとする論文にまとめられた。また原富男『補史記芸文志』（春秋社、1980年）は、金徳建『司馬遷所見書考』（上海人民出版社、1963年）が、『史記』の材料となる書籍を考証したように、『史記』にみえる典籍について解説したものである。これらは、『史記』の構造と編集過程を明らかにすることに結びつく研究である。

また60年代では、『史記』の編集方法にかかわる宮崎市定「身振りと文学—史記成立の一試論」（1965年、のち『宮崎市定全集』5、1991年）が注目される。ここでは『史記』の来源となる書写材料のほかに、刺客列伝や項羽本紀などの表現を考察して、身振りを伴って話された語り物という点を強調した。そしてこの語り物が上演された場所は、とくに都市の「市」を想定し、司馬遷はこれらの民間説話を蒐集・選択して『史記』の中に書き込んだと推測する。さらに「史記李斯列伝を読む」（1977年）では、列伝の主要部が起承転結のリズムによって展開されてゆく特色があることを述べる。そしてその構成材料を、①比較的信頼すべき公文書の流れを汲む「奏事二十篇」のようなもの、②秦漢の交に作成された縦横家流の著述で「零陵令信」一篇のようなもの、③民間で語られた偶語のうち趙高を主人公とした復讐物語、④偶語の系統の四種類に分類されている。これは本紀や列伝の一部を対象としているが、『史記』全体にかかわ

る問題を提示している。

これにつづいて70年代以降では、宮崎市定『史記を語る』（1979年、のち『宮崎市定全集』5、1991年、岩波文庫、1996年）や、増井経夫『史記の世界』（日本放送出版協会、1987年）などの概説があらわれた。これらで総括されている内容は、これまでも『史記』翻訳の解説・改題や、司馬遷の伝記に総論としての記述がみられる。

このほか『史記』総論に関する論文で問題となっている項目をみると、漢太史令の役割や、著作年代、著作目的、春秋学との関係などがある。たとえば著作年代では、伊藤徳男「麟止と獲麟」（『歴史』29、1965年）が武帝期の「麟止」をめぐる下限年代を想定する。また『史記』と春秋学の問題では、従来から公羊学と深く関係することが指摘されているが、今鷹真「『空言』『空文』考」（『入矢教授・小川教授退休記念中国文学語学論集』、1974年）のように、太史公自序にみえる〈空言〉の解釈をめぐる議論などがある。

『史記』各篇の研究

つぎに『史記』各篇の研究から、本紀・十表・八書・世家に関する論点をみておこう。

まず『史記』本紀の構成に関する研究として、栗原朋信「史記の秦始皇本紀に関する二・三の研究」（『秦漢史の研究』吉川弘文館、1960年）がある。ここでは「秦記」が秦本紀・秦始皇本紀に取り入れられたことを述べ、『史記』の記述には漢代の評価がふくまれるという注意をうながしている。これは主として秦始皇本紀を対象とするが、『史記』の編集と性格にかかわる重要な問題を提起している。

また本紀・世家の構成原理を考察する論文がある。伊藤徳男氏は「『史記』本紀の構成」（『東北大学教養部紀要』15、1972年）、「『史記』世家の構成」（同紀要19、1974年）で、その配列に司馬遷の封建制度への関心を指摘する。上田早苗「史記の構成と黄老思想」（『奈良女子大学研究年報』20、1977年）、同「史記の構成と終始五徳説」（『東洋史研究』38-4、1980年）は、黄老・五行説等の視

点から、本紀・世家・表の構成原理を説明する。

これをさらに十表において展開したのが、伊藤徳男『史記十表に見る司馬遷の歴史観』（平川出版社、1994年）である。ここでは司馬遷父子が、漢武帝の特別な計らいによって、『史記』執筆のために宮廷の記録・文書などを閲覧する機会に恵まれたという。そこで『史記』の漢代史にみえる直筆とおもわれる部分は先行資料の丸写しで、司馬遷の歴史批判はむしろ年表の中に示されているとする。その過程で十表の構成を詳しく考察し、それを一般書としたものが『「史記」と司馬遷』（山川出版社、1996年）である。したがって後者は、司馬遷と『史記』にかかわるが、とくに年表の意義という視点から描いている。

このように『史記』の構成については、いくつかの成果があり、また本紀・表・書・世家の個別研究も蓄積されている。その傾向をみると、本紀では秦本紀・秦始皇本紀のほか、殷本紀・項羽本紀・呂后本紀・武帝（今上）本紀などの考察がある。また十表の研究では、十二諸侯年表・六国年表について新しい研究があるが、これは後述する。

八書は、これまで制度史・文化史といわれるが、加地伸行「『史記』の「書」について」（『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』朋友書店、1979年）のように、その内容は独立した文化史ではなく、書の構成は一連性をもつという主張がある。また明治以前では、律・暦・天官三書が注目されていたのにつづき新たな論考がみられる。しかし近年では、とくに封禪書・平準書への関心が高まり、漢代の財政・経済問題に関連して平準書・貨殖列伝にふれたものは多い。山田勝芳「前漢武帝代の祭祀と財政」（『東北大学教養部紀要』37、1982年）は、封禪書が祭祀儀礼を記すのに対して、平準書ではそのため財政困難に陥った、いわば光と影の部分を描いたと指摘する。また河渠書は、水利史との関連で検討され1分野を形成している。これらは近年の社会経済史研究の発展と関連しており、経済思想につながる業績といえよう。

世家では、従来から孔子世家への関心がつよく、その検討はとくに経歴の信頼性にかかわる議論が多いようである。これに関連して『史記』諸子列伝に関する考察があり、孔子との関係が注目されている。また世家に描かれた人物像

も、一つの研究対象となっている。

『史記』列伝

『史記』各篇のなかでは、とくに列伝に関する研究が多い。それは『史記』列伝が社会と人間を描くことから、人間・社会・思想にふれた考察がみられ、またその文学性を強調する研究がある。

このうち『史記』列伝をまとめた研究には、先の宮崎市定氏の一連の論文のほか、伊藤徳男氏に「史記雑伝の研究（上・下）」（『集刊東洋学』17, 19, 1967, 1968）と、循吏と酷吏、李斯・蒙恬列伝、日者・亀策列伝などを論じた研究がある。俣野太郎氏は、「史記刺客列伝についての臆測」（無窮会『東洋文化研究所紀要』5, 1964年）をはじめ、循吏・酷吏列伝や、公孫弘の人物評価、武帝期の権臣などを考察して、司馬遷と同時代の諸篇に共通した倫理的尺度があることを述べている。また新田幸治『遷生竜門—列伝を読む』（東京プリント社, 1982年）は、太史公自序にみえる司馬遷の伝記・旅行と貨殖列伝との関係や、漢代儒学の動向などを論じたものである。

このほか列伝の各篇では、共通して注目されている諸篇がある。その一は、冒頭の「伯夷列伝」である。この篇は列伝の総論とみなされているため、『史記』列伝の配列全体とのかかわりで理解しようとする視点が多く、これまでの司馬遷と『史記』の著書でもふれられ、また個別研究も蓄積されている。

二は、「伍子胥列伝」である。この篇は典型的な復讐物語であるために、60年代から日原利国「復讐の論理と倫理」（1974, のち『春秋公羊伝の研究』創文社, 1976年）のように、怨恨や復讐と関連して論じられ、下見隆雄「怨恨と復讐の構図」（『福岡女子短大紀要』11, 1976年）もある。また福島正「伍子胥、司馬遷、そして怨み」（『大阪教育大学紀要』人文科学 37-2, 1988年）は、その思想を司馬遷の経歴と関連して理解しようとする。

三は、諸子列伝である。これは著作を残した人物に関する伝記で、老子・莊子や屈原が注目されている。

四は、刺客列伝・酷吏列伝・游侠列伝など一連の人物を記した雑伝である。

ここでは、任侠の問題とも関連し、多様な議論がある。また医学史にかかわる「扁鵲列伝」も、森田伝一郎「扁鵲考」（『日本中国学会報』32, 1980年）、山田慶児「扁鵲伝説」（1988, のち『夜鳴く鳥』岩波書店, 1990年）などで考察されている。

五は、外国列伝である。これは榎一雄「史記大宛伝と漢書張騫・李広利伝との関係について」（『東洋学報』64・1・2, 1983年）や、匈奴列伝、西南夷列伝、朝鮮列伝など周辺諸国の研究と関連している。

これ以外の列伝研究は、全体のなかで論じられる場合をのぞいて、なお十分には共通討論ができるほど蓄積されていないようである。したがって『史記』列伝の研究では、さらに今後に残された課題がある。

『史記』研究の新しい動向

以上のような動向に対して、最近では新しい視点による『史記』研究が現れている。これらは本来、『史記』各篇の研究に対応するが、ただ個別の篇を扱うのではなく、ある一定の範囲のもとで総括を試みるものである。この意味において、『史記』全体の考察につながる意図をもっている。

その一は、コンピューターによるデータ分析と、科学史の視点を応用した『史記』研究である。すでに上田早苗「『史記』の計量的分析」（『漢代史料に関する計量的分析の開発』科学研究成果報告書, 1986年）では、『史記』全巻のデータ・ベースを作成し、文字統計を行った。そして漢字使用頻度の一覧表などを説明して、新しい『史記』研究の可能性を提示した。しかしその後、この成果は十分に適用されないうちに、コンピューターの効率と作業領域は大きく拡大した。その間、李曉光・李波主編『史記索引』（中国広播電視出版社, 1989年）の一字索引が刊行され、また『史記』のデータ・ベースも利用されるようになっていく。

このような情勢をうけて『史記』紀年資料の分析に取り組んだのが、平勢隆郎編著『新編史記東周年表』（東京大学東洋文化研究所報告, 東京大学出版会, 1995年）である。その主な対象は、十二諸侯年表と六国年表と、春秋・戦国時

代の本紀・世家・列伝である。ここでは『史記』の春秋・戦国時代の記事に、複数の年代が現れ矛盾することは、決して原資料が矛盾していたのではなく、司馬遷が原資料を配列して編集する際に誤解したためであると考えられる。その復元の第一基準として、諸国の君主が亡くなった年に称元する方法（立年称元）から、戦国中期の王号を称した国で、翌年に即位する方法（踰年称元）への変化を、司馬遷は知らずに自分の判断で編集したことをあげる。このほか諸国暦法の相違や、君主在位の誤りと封君紀年との混同、原資料を転写・繋年する際の誤りなど、修正の原理を想定している。そして十二諸侯年表・六国年表を修正・再編するとき、データ・ベースを活用している。この原理と修正が妥当かどうかは、『史記』紀年と従来の紀年研究を参照しながら、それぞれの事例について検証の余地がある。しかし司馬遷が、先行する紀年資料を利用して編集した原理を追求し、その一端を明らかにしたことは功績であろう。

これに関連して、斉藤国治・小澤賢二『中国古代の天文記録の検証』（雄山閣、1992年）では、『史記』をふくむ正史の天文資料と、現代の天文学の成果を比較して、古代の紀年を考察している。これも『史記』の科学史研究の一つといえることができる。

その二は、出土書籍の利用である。周知のように近年中国では、戦国・秦漢時代の古墓に副葬された簡牘・帛書が発見され、佐藤武敏監修『馬王堆帛書・戦国縦横家書』（朋友書店、1993年）は、その新資料の訳注である。ここには未知の戦国故事に、蘇秦と思われる人物の書信と奏言が収録されており、楊寛『戦国史』（新版、1980年、増訂本、1998年）などで、『史記』蘇秦列伝の矛盾が訂正できることが指摘されている。藤田勝久「『史記』蘇秦・張儀列伝の史料的考察」（『愛媛大学教養部紀要』25、1992年）は、張儀列伝と比較しながら、蘇秦の活躍を『史記』列伝より遅く戦国中期とする説を支持している。しかしさらに重要なことは、帛書『戦国縦横家書』には、『史記』『戦国策』と共通する故事をふくんでおり、それが韓・魏・趙世家、田敬仲完世家、穰侯列伝などに組み込まれていることである。ここから司馬遷は、先行する戦国故事の写本にもとづき、それを自己の観点から配列して編集したことが論証できる。藤田勝久

『史記戦国史料の研究』（東京大学出版会、1997年）は、第一章「『史記』と中国出土書籍」で、戦国紀年・系譜・故事・説話に関連する資料の紹介をし、この特徴と『竹書紀年』『世本』『戦国策』などの性格を比較した上で、『史記』秦本紀・戦国世家の構成と編集過程を考察したものである。またここでは睡虎地秦簡『編年記』との比較によって、『史記』には秦紀年資料のほかに、暦法の異なる趙の紀年資料が利用されたことを指摘している。これは先の平勢氏と異なるアプローチから同じ結論に達しており、考古資料との比較が『史記』の新研究につながることを示唆している。

その三は、『史記』に描かれた世界を現地調査によって再検討しようとする方法であり、鶴間和幸氏の秦本紀・秦始皇本紀に関する一連の研究がある。戦国秦の歴史や、始皇帝とその時代については、まず文献による研究が進められていた。それを補うものとして近年では、文物・遺跡や睡虎地秦簡などの考古学資料による研究があるが、鶴間氏は一步すすめて歴史地理・伝承の方面からも考察を加えている。それは「秦帝国の形成と地域—始皇帝の虚像を超えて」（『歴史と地理』372, 1986年）で問題を提示し、つづいて秦帝国の道路網、始皇帝の東方巡狩経路の調査、東方巡狩刻石、始皇帝の泗水周鼎引き上げ失敗伝説と荊軻秦王暗殺未遂伝説、古代巴蜀の治水伝説、始皇帝陵建設、長城建設などを論じている。とくに注目されるのは、始皇帝の巡狩経路が司馬遷の旅行ルートと共通することであり、「司馬遷の時代と始皇帝—秦始皇本紀編纂の歴史的背景」（『東洋学報』77-1・2, 1995年）では、司馬遷がどのように始皇帝の伝説と遭遇したかを検証し、「漢代における秦王朝史観の変遷」（『茨城大学教養部紀要』29, 1995年）では、賈誼『過秦論』など漢代の始皇帝評価と司馬遷の立場を考察している。これは『史記』の描かれた世界を、そのまま理解するのではなく、司馬遷が選択しなかった伝承・知見をふくめて、歴史像を再構成しようとする新しい研究といえよう。

このように従来の文献研究を補い、新たな視野を開く研究として、①コンピュータの情報処理による分析や、②出土資料の積極的な比較利用、③現地調査による『史記』の史料批判という方法が試みられている。

このほか『史記』に関連する研究は多く、それは他資料との比較研究や、文学、表現・言語、漢文教育、日本文化との関係などの視点がみられる。

他資料との比較研究では、経書や『春秋左氏伝』『戦国策』、諸子などとの関連が問題となり、『漢書』との比較も重要な研究である。その代表的なものは、鎌田正『左伝の成立と其の展開』（大修館書店、1963年）で、『左伝』『国語』との構文比較を通じて、『史記』が『左伝』を引用したことを論じている。平勢隆郎『左伝の史料批判的研究』（東京大学東洋文化研究所報告、汲古書院、1998年）では、小倉芳彦『春秋左氏伝』（岩波文庫、1988、89年）の分類を発展させて『左伝』経伝の構成を分析しており、『史記』の構造ともかかわる。

『漢書』では、班氏父子を中心とした歴史書の著作背景が問題となり、稲葉一郎『『漢書』の成立』（『東洋史研究』48-3、1989年）は、『史記』と対比させて班固の歴史観を考察している。また『漢書』の特色、各篇の内容を論じた研究などは、『史記』の影響を考察した研究ともいえよう。

つぎに『史記』は、歴史学・思想のほか文学的な観点からも考察され、その文学表現や文体・言語の特徴を論じた研究がある。これまで『史記』の文学的・小説的な側面を強調されたのは、吉川幸次郎『史伝の文学』（『支那学』1947年）や、前野直彬「史記の小説的な側面について」（『漢文学会会報』17、1957年）であるが、さらに人間描写・表現への考察へと進み、語法の研究も大切な分野である。その一つに、田中謙二「史記における人間描写」（『中国文学報』13、1960年）があり、同じく「史記における表現の反復」（1957年）、「史記の〈笑い〉」（1970年）は、表現の特色から司馬遷の文学性を説明しており、のち『ことばと文学』（汲古書院、1993年）に収録されている。また『史記』は、日本の高等学校で漢文教材として採用されているが、「鴻門の会」などを例にとった教材研究もみられる。

日本文学との関係を考察した研究は、『史記』の受容にかかわる問題を提供する。これは広く日本の漢籍受容史の一部を形成し、そこでは平安時代の『源氏物語』や、『平家物語』『太平記』『大鏡』などへの影響が考察されている。

以上のように、日本における『史記』研究の分野は広く、その論点も多くの

範囲にわたっている。ここではその動向を概観したにすぎないが、これによって日本の『史記』研究の一傾向が理解できよう。

お わ り に

——日中文化交流史の一側面——

『史記』が日本に伝来してから、今日まで約1,500年が経過している。その間、『史記』が日本社会に普及してゆく歴史を通じて、どのような日中文化交流史の側面がみえてくるであろうか。また日本の『史記』伝来と普及・研究には、どのような特色があるのであろうか。

日中文化交流史からみれば、『史記』は必ずしも独自に伝来し普及したものではない。それは数多くの漢籍輸入の歴史の中で、同じように日本にもたらされ、しだいに普及していったものである。

たとえば日本では、当初、経書をはじめとする漢籍を中国・朝鮮から輸入し、その中で『史記』『漢書』などの史書も伝来したとおもわれる。そして日本の学制が整えられる過程で、経書とともに史書もテキストとなり、書写による写本が残された。また普及という点からいえば、奈良・平安時代に中央の大学・地方の国学で学ぶほか、天皇をはじめ貴族が教養として『史記』を習うことがあったが、なお一部の階級に限られていた。その一方で、『芸文類聚』のような類書によっても『史記』のエピソードが知られ、しだいに日本社会で『史記』が親しまれるようになっていく。鎌倉・室町時代になると、貴族にかわって禅宗の僧侶が漢籍を講義するようになり、この時期に『史記抄』といわれる注釈が現れた。また江戸時代には、多くの和刻本とともに『史記』の和刻本が刊行され、武士や漢学者・町人などへの普及に役立ち、天文・暦法・医学など実学の方面にも関心がよせられている。したがって『史記』の伝来と普及の問題は、今後とも広く他の漢籍の動向とともに、その受容と研究を考察する視点が必要となるだろう。

ところが近現代に近づくにつれ、『史記』は歴史書としてだけでなく、その人

間ドラマと思想が注目され、しだいに歴史・文学・思想の方面から独自に評価されるに至っている。そして『史記』の原典だけでなく、日本語の翻訳や、小説・読み物などによって、その内容が広く知られるようになった。この意味において『史記』は、現代にいたって最も注目を集める書物になったと言うことができよう。しかしそのことと、日本における『史記』研究のあり方は必ずしも一致しない。池田英雄氏が『史記学 50 年』で指摘されるように、たしかに日本は中国につぐ『史記』研究の多い国であるが、その数は中国に比べてはるかに少ないだけでなく、その視点や研究方法も異なっている。それでは日本の『史記』研究には、どのような特色があり、また今後どのような展開が考えられるのであろうか。

まず第一の特色は、すでに中国で失われた『史記』古鈔本が日本に残存していることである。たしかに中国でも、敦煌文書のように一部の『史記』残巻が発見されているが、日本には平安時代以降の書写本がいくつか伝わっており、『史記』の様々な時代の形態をうかがわせる貴重な資料となっている。さらに重要なことは、それらの古鈔本とともに、日本に伝えられた版本には、欄外に多くの「書き入れ」があるということである。これは日本の『史記』古鈔本・版本そのものが貴重というだけでなく、ここには散逸した注釈などが保存されており、『史記』研究のもう一つの側面を伝えているのである。その典型的な一例は、『史記正義』の注釈であろう。しかしこれらの「書き入れ」は、早くは『史記会注考証』の引用で紹介され、その後、オリジナルな古鈔本・版本が公刊されるなかで、『国宝史記』（国立歴史民俗博物館所蔵、黄善夫本）の影印が刊行され、その本文と書き込みの形態が一望できるようになっている。したがって今後は、日本の『史記』古鈔本・版本の影印を刊行し整理してゆくことが、日中両国の研究にとって大きな貢献となるであろう。

第二に、これと並行して日本の『史記』研究の文字校勘・注釈の影印を刊行することも、重要な事業となる。たとえば室町時代の『史記桃源抄』は、その積文が刊行されているが、その全文は影印されていない。また江戸時代の中井履軒『史記雕題』は、ほぼ全体が影印刊行されたが、なお『漢書』『戦国策』な

どの注釈も比較検討の課題となる。したがってこれらの文字校勘・注釈のうち、主要な研究だけでも影印刊行すれば、それは日本独自の貢献となるはずである。またこれらの注釈が、オリジナルな形で公刊されれば、あらためて『史記会注考証』と池田四郎次郎『史記補注』の作業を見直し、その限界性と独自性を再評価することができよう。

第三に、日本の『史記』研究には、中国の研究と共通する視点もあるが、独自の観点からの研究もあり、それは各時代の『史記』研究の動向に影響を及ぼしている。その一部は、中国語に翻訳して紹介されているが、大半の著書・論文は日本語のまま中国にはあまり知られていないものがある。また『史記』研究の文献目録に収録されている著書・論文でも、中国では入手しにくいものがある。このような事情は日本でも同様である。したがって日本の『史記』研究の内容と動向を正しく紹介するには、代表的な著書・論文を年代順に要約したり、あるいは代表的な論文そのものを論文集として編集刊行することが必要である。これはまた日本の中国史学史の一部ともなる。

第四に、これまでの先行研究をふまえながら、日本の『史記』研究のテーマを意識的に設定する必要がある。たとえば当然のことであるが、現代日本人の視点から『史記』を論評することは、それで一つの理解の仕方である。また文学研究のように、時代性とは関係なく人間の真実を探ろうとする視点も一つの方法である。しかし『史記』は中国古代の著述であり、日本人は外国人であることからすれば、現代日本人の価値観を基準とすることは、大切な側面を見失うのではないだろうか。つまり『史記』の本質を理解しようとするとき、少なくとも司馬遷が生きた古代社会を共感しようとする姿勢が必要ではないだろうか。この意味で、佐藤武敏氏の『司馬遷の研究』のように『史記』成立時の情勢を考察する視点は注目される。また近年日本の新しい動向として、平勢隆郎編著『新編史記東周年表』が、司馬遷の利用した紀年資料のうち、できるだけ原型を残しながら編集の方法を復元するという研究は、一つの方向を示唆するであろう。また藤田勝久『史記戦国史料の研究』では、司馬遷の利用した材料と編集手法を分析する対象として、外部の出土資料の形式を手がかりとしなが

ら比較するという方法をとっている。これらは、いわば司馬遷との対話を求める方向であり、また『史記』成立の問題を考古学資料の利用という視点によって解明しようとする立場である。このように日本の『史記』研究の立場を明らかにしながら、また独自の方法を自覚することによって、中国の『史記』研究との学術交流ができるのではないかとおもわれる。

注

1) 日本の『史記』研究は、漢代史研究の文献目録や、歴史事典、正史文献目録、中国文学・思想の分類の中で、司馬遷と『史記』の項目が立てられたり、中国史書の解題の一つとして紹介されている。その中で『史記会注考証』史記総論と、池田四郎次郎「我邦に於ける史記の価値」(1932年)は、専論の早い例であろう。『史記研究書目解題稿本』は、この時期までの日中両国の研究解題で、日中『史記』研究史の概略ということもできよう。1「史記の版本と其参考書」とあわせ計15分類となっている。2諸本、3総説、4校訂注釈(全書)、5校訂注釈(部分)、6校勘、7文字・音韻、8文評、9佳句・名言、10史・漢異同、11太史公年譜、12地理、13国字解、14稗史、15史記研究関連図書である。これはさらに補訂した『史記研究書目解題新編』(長年堂、1981年)が作られたが、私家版で部数が限定されている。また池田英雄『史記学50年』(1995年)は、『史記』研究の解題に重点をおくよりも、むしろ日・中の研究動向を位置づけ、その共通点・相違点を分析しながら、今後の展望を考えることに力点が置かれている。

また近年の紹介と目録には、拙稿「『史記』『漢書』研究文献目録(日本篇)」(間瀬収芳編『「史記」「漢書」の再検討と古代社会の地域的研究』1994年)があり、本稿は、これを改稿したものである。このほか吉原英夫編『「史記」に関する文献目録』(北海道教育大学札幌校、1997年)がある。

〔主要参考文献〕

- 池田四郎次郎著・池田英雄校訂増補『史記研究書目解題稿本』(明德出版社、1978年)
 池田四郎次郎・池田英雄『史記研究書目解題新編』私家版(長年堂、1981年)
 池田四郎次郎「我邦に於ける史記の価値」(二松大学雑誌『二松』2、1932年、のち『史記研究書目解題新編』に再録)
 池田英雄「著作より見たる本邦先哲の史記研究—古今伝承1300年間の消長」(『大東文化大学

日本の『史記』研究

- 創立六十周年記念中国学論集』所収、1984年)
- 池田英雄、張新科・朱曉琳訳「從著作看日本先哲的《史記》研究—古今伝承 1300 年間の変遷」(『唐都学刊』1993年4期)
- 池田英雄「日・中各時代に於ける《史記》受容のあり方を検証す」(『栗原圭介博士頌寿記念東洋学論集』所収、1995年)
- 池田英雄「最近五十年来《史記》研究の展開(1945—1995) 一日・中の比較と、その長短」(無窮会『東洋文化』76、1996年)
- 覃啓勳『《史記》与日本文化』(武漢大学出版社、1989年)
- 張新科・俞樟華『史記研究史略』附録：日本《史記》研究概述(三秦出版社、1990年)
- 青木五郎、兪国華訳「《史記》在日本」(王勇主編『中日漢籍交流史論』杭州大学出版社、1992年)
- 寺門日出男・吉原英夫「日本における『史記』の受容」(『研究資料漢文学第7巻 歴史Ⅰ—史記』明治書院、1994年)
- 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』(同朋舎出版、1984年)
- 大庭脩・王勇編『日中文化交流史叢書9典籍』(大修館書店、1996年)
- 大庭脩『漢籍輸入の文化史—聖徳太子から吉宗へ』(研文出版、1997年)
- 藤田勝久「『史記』『漢書』研究文献目録(日本篇)」(間瀬収芳編『「史記」「漢書」の再検討と古代社会の地域的研究』1994年)
- 吉原英夫編『「史記」に関する文献目録』(北海道教育大学札幌校、1997年)